

839
12
61

新
國
誌
上

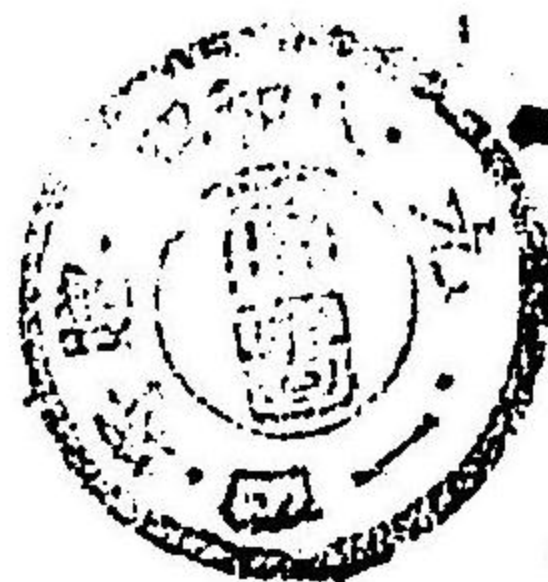
下野國誌十二之卷

曾山文庫

古碑墳墓

芳賀百姓越智直守不識

根津藩氏家藏



那須國造碑

那須郡湯津上村ふあで黒羽城下より南の方と一里許を近郷の俗に笠石と呼ぶありしに其形扁石をくがめて笠の如く碑の上より故に然りなかりて此碑は人皇四十二代文武天皇の庚子年一建しりものにて今嘉永元年小至る千百五十年より及ぶなりされ日本第一の古碑あり碑の高さ今の曲尺にて四尺許あり石は石工の御影石にて正面の砥の如く磨きとて左右其外は自然石あり碑文は一行十九字つゝ八行とて百五十二字あり此碑天和のころ草むられ中ふ倒れしりしと知る人なり故に草刈りしりし寺に草むらりし腰うち掛

まい其ありふ尿なごまらんばいもたらに物狂ふか或は大熱を發して
 さむくの事ども口ごりせらるるを然る其頃奥州岩城の頭陀僧圓順と
 云者にやて其よりを同郡武茂庄小口郷梅ヶ平の里に大金の衛門重貞
 と云者不語る天和三年癸亥六月廿七日水戸黄門光國卿武茂庄馬頭村
 下向の節、重貞右の始末を言上り、貞享四年丁卯九月廿四日馬頭村へ再
 び下向有て、儒臣佐々助三郎宗淳に命じて、おの彼所へ遣り、碑文を印
 打せしめて見せたり。則宗淳ふまより、欠給ひ古を慕ひ給ふ御志
 深くまゝ、ゆせ、元祿四年辛未二月有司并に重貞より計りて、湯津上村
 御代官所并に坂本内記殿安藤九郎右衛門殿の知行と入會の地を
 替代の地を加へ給ひ、碑の在所凡に二反歩許を水戸の封境と給ひ、
 堅八間横七間の塚を新に築き、其上に寶形造りの堂を建て、其中
 に彼碑を安置し、但し堂は南向なり、然して同五年壬申六月廿五日光國
 卿當所へ下向有て、其堂の東の傍に泉藏院と云修験を住居とせ、月
 俸を下し給ひ、彼堂を守らしめ給ふ、しが印打さるるあり、容易
 よ、見事事も許さるるなり。

那須國造碑之圖

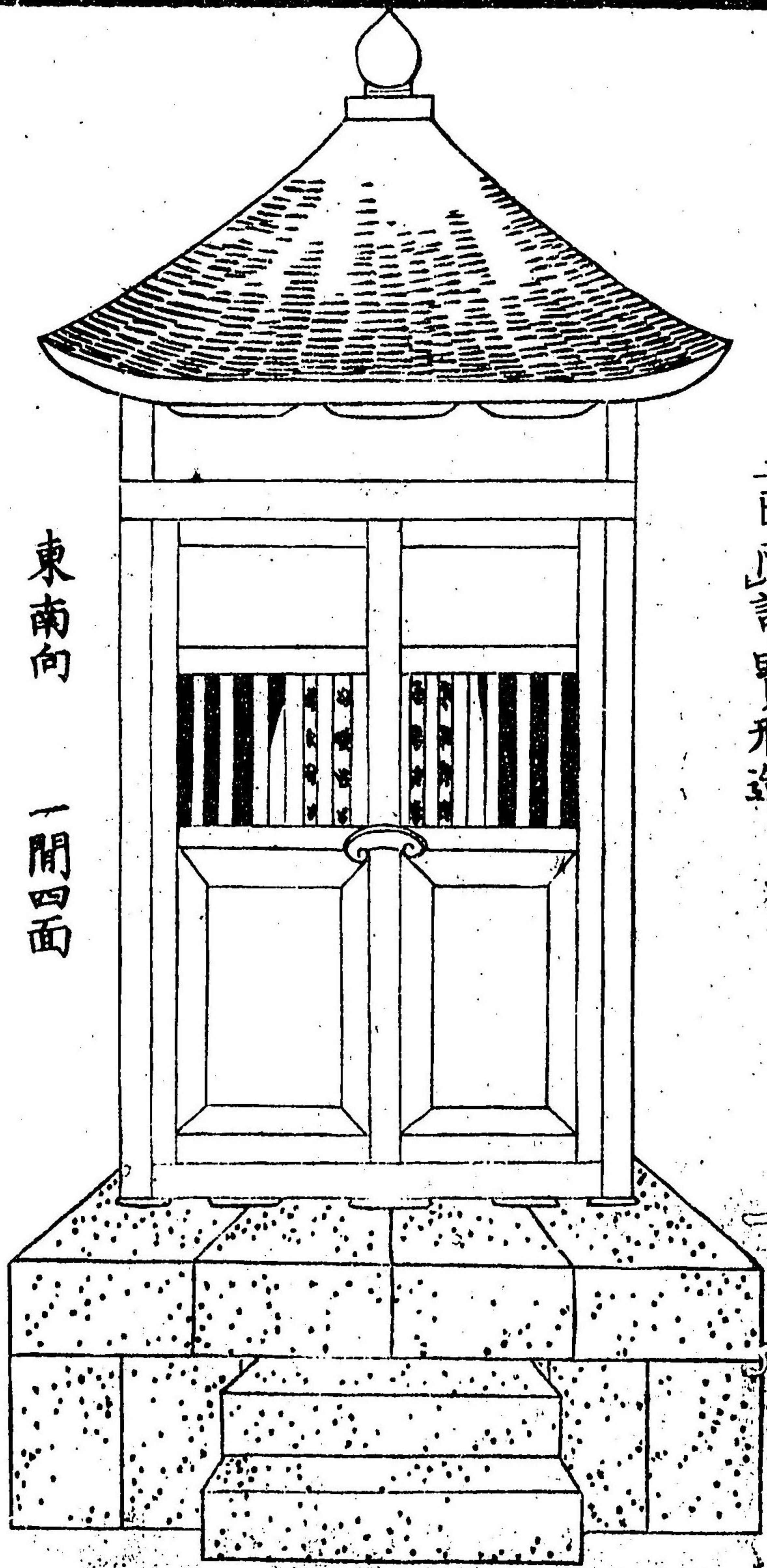


讀那須國造碑 心越禪師

碑殘草宿在荒村子古遺風今尚存
 曠昔君臣斯不再空令後世續餘論

同堂之圖

工匠所謂寶形造



東南向 一間四面

碑文正面摺

但一本文ハ一行十九字フ八行ニテ総字數百五十二字
ナレドモ一ハ一行八字フ十九行小換刻也

永昌元年己丑四月
飛鳥淨御原大宮那
須國造婁大壹那須
直等從部督禮賜歲

次康子年正月二
子日辰節祔故意斯
麻呂寺立碑銘德去
尔抑惟殯公齊民壽
能一國竈棟樑一世

中重被貶照一命之
期連見再甦碎骨魏
隨崇報前恩是以曾
子之家无有孀子仲
民之門无有冢者行

孝之子不改其譜
茂堯心澄神張
乾六月童子意育
神作徒之大合言
翁字故無翼長飛
元根更固

納那須國造瑩中鏡之圖

背



徑五寸



佐々宗淳碑文考

宗淳姓良家通稱助三郎水戶黃門義公儒臣彰考館總裁也元祿十一年没云

貞享四年之秋予奉君命至那須親寫碑文元年上二字不甚分明乃摸印見之永昌二字也然本邦無永昌號焉飛鳥淨御原天武朝也天武有朱鳥號永昌字形稍似朱鳥想是歲月之久字體訛缺也因推為朱鳥歸後考之朱鳥元年歲在丙戌而此曰己丑則非朱鳥也明矣今按唐武后永昌元年歲在己丑而當持統三年此時本邦年號闕

故假用異域年號乎弥故二字於義不安疑是物故之訛乎庚子年是文武四年也蓋那須國造天武朝人物而歷仕持統文武者也凡上世碑碣今存于世者此碑與陸奧壺碑也而壺碑為好事者往々摸寫此碑在荒墳茂草之間無人識之者自非我君侯好古之深安得傳之世間乎死者若有知那須國造忻々然於地下焉

蒲生秀賢同考

秀賢姓藤原字君平号修静庵通稱伊三郎宇都宮人自曰飛彈守秀行後裔撰山陵志

那須國造碑在下野國那須郡湯津上村。此蓋文
武帝時所建。後世埋沒無聞者幾一千載矣。貞享
年中常陸源義公遊那須溫泉路獲之。以為那須
古國名國造其封爵也。是當時君長之墓碑可不
敬哉。廼因碑所在葬埋新鏡以代其靈而起墳安
碑乎其上建碑亭且置守戶。然其文已殘缺語亦
古質不可輒通解也。第筆力渾雅道勁自有晉唐
風是可賞也。其首云永昌元年己丑四月飛鳥淨

御原大宮那須國造追大壹那須直事提評督被
賜歲次庚子年正月二壬子日辰節弥故意斯麻
呂等立碑銘德云尔。愚以為

天朝自古未嘗有年号永昌者是唐之則天所建。
其元年己丑實當持統帝三年。按史持統帝元年
及三年四年荐置新羅投化者於下野。据上官太
子憲法已有國司國造語。及大化二年詔所云郡
司取國造性識清廉堪時務者則國司之置尚矣。

國司既置專知治務而國造勢遂卑雖報稱舊号然其國或降為郡非復先世封爵徒以故家名庶奉其祭祀時或擇其才局以補郡領耳不知那須此時已為郡隸于下野承國司處分置新羅投化者於其地耶盖當時新羅奉唐之正朔所謂意斯麻呂等或其投化者不然亦效投化者之言用彼年号也飛鳥淨御原是天武帝所都帝崩太子皇后居攝三年太子薨四年即真持統帝是也八年

年遷都藤原而此碑稱淨御原在其未遷之前也自是至文武帝四年不建年号而今用唐永昌之号人或疑當時稱蕃西土奉其正朔者果然則年次庚子上亦當用彼年号庚子者是文武帝四年而則天久視元年也可知其改元在新羅投化之後而未得知之故不用也苟稱蕃西土如琉球朝鮮之國則彼年号豈能得於前而喪於後如此哉那須鄙人固不知名分也偶視年号闕而妄嫌其

不文雅因致如此之孟浪無謂耳。

諸葛琴臺同解

琴臺名篆蟲字君測号琴臺又涵月樓通称次郎大夫那須郡蛭田人姫路侯侍講文化十年没

碑文誤字辨

第二行ノ評督ノ評字義ヲナサズ且ッ石面モタレカニ許字トモ見エズ疑ラクハ都督ナルベレ同行ノ康子ノ康ノ字ハタレカニ康字ニアレドモ康字ニアラザレ義ヲナサズ

第三行ノ弥故ノ弥字大カタ弥ニ見ユドモ物故ノ誤ナルベレ銘偲ノ偲字モシカニ偲字ナレドモ是モ銘徳ノ誤ナルベレ

第四行ノ貳字モ貳ノ誤ナリ

第六行ノ嬌字モ驕ニアラザレバ通ゼズ

第六行ノ茂堯ノ二字モ義ヲナサズ石面モ彷彿トシテ何字トモワカリカタレ恐ラクハ乃老ノ文字漫漶シテ字畫多クナリタルナルベレ同行ノ六月ノ六ハ大字ノ誤ナルベレ月モマタ彷彿トシテワカリカタレ疑ラクハ引字ノ誤ナルベレ育ハ香ノ誤ナラン徒字モ徒ノ誤ナルベレ

碑文総テ一百五十二字ノ中ニ誤字十二字アリ文ヲ作ルホトク人字ヲ知ラサル事ハアラジモレ又石工ノ鑿ミ誤ルトモ是ル時及ビテ鑿定セザル夏ハアラジ按ズルニ是ハ最初彫刻セシ時文字ノ細カリシニ依テ千有餘年ノ星霜ヲ経ル間ニ剥落磨滅シテ讀カタクキヲ土俗其漫滅ヲ惜ミ石工ヲ請シテ修理セシムルニ石工モ土俗モトモ文字ヲ知ラザレバ安リニ磨礪ヲ加ヘレ後舊キ痕ヲ追テ再刻シ知ラサル文字ヲ随意ニ改メシ故ニ斯ク如ク誤字多ク出来シモノナリ然ルヲ去ヌル元祿中源黄門義公是ヲ聞シ名重興シ給ヒケレバ三十年ニシテ始テ白日ヲ見ルトイハ下モ林孫通ナレ誰カ今テ文ヲ寫シテ是ヲ讀ム事ヲ得ン予那須ノ邊土ニ生レテ所ニ在テ距ル事今ノ道程二里許且其地ニ成長スル事二十歳見ル毎何人ノ為如何ナル故ニ此碑有ルト云事知レサルヲ歎ズ然ルヲ幸ヒ夫ノ羅聖ニ因テ書ヲ讀ミ斯文ニ與ル事ヲ得テ思テ措ザル後久シキ終ニ此碑文通ズ故ニ考究シテ好事ノ人ニルヌ云ク

碑文注解

永昌元年己丑四月飛鳥浄御原大宮那須國造

追大壹那須直韋提都督被賜。

永昌ハ唐ノ武后ノ年号ヲ假用ヒタルナリ、持統天皇ノ三年己丑四月、大和國ノ飛鳥ノ淨御原ノ大宮ヨリ那須ノ國ノ造叙爵、追大壹姓ハ那須ノ直名ハ韋提ト云人ニ始テ都督ノ職ヲ賜ハリタルト云ナリ、サテ唐ノ年号ヲ假用ヒタル故ニ諸説アリテ一定セヌナリ、此永昌ト云モ唐ノ正統ノ年号ニハアラズ、此時皇國ニモ年号ト云事始リテ、天武ノ御世ハ百鳳十四年マテ續キ、翌年改元有テ朱鳥ト改ム、其時天皇崩御シ、ハ持統天皇御位ニ即キ給ヒシヨリ、以前ノ如ク年号ヲ止メテ、持統ノ元年二年三年ト唱ヘタリ、マタ此時ニ唐土ニテハ中宗皇帝ノ嗣聖六年ニ多レリ、然ルニ先帝ノ后武氏ノ人中宗ヲ廢シテ其弟豫王且ヲ立テ睿宗トシ、天下ノ政道ハ武后ヨリ出ル故ニ年号ヲ立テ己丑ノ年ヲ以テ永昌元年トス、故ニ皇朝ノ碑ニ此年号ヲ用ヒタルユエヲ知ラズ、人皆アヤシムナリ、其頃ハ皇朝ト三幹ト云信ヲ通シテ聘使往来シ、幹罪人アル時ハ皇國ヘ七放逐スル事アリ、是ヲナツケテ投化人ト云ナリ、鈴木澤民云、同國廢治人号石橋通称大坂屋四郎兵衛蒲生君平之師也、此碑ハ投化人ノ書タルナルベシ故ニ

續日本紀
仁明天皇嘉
祥元年五月
陸奥國白川
郡大領正七
位上奈須直
木龜ト云々
ネリ那須
と白川ト云
連

唐ノ年号ヲ用ヒタルナラント云、此說極メテヨシ、日本書紀ニ持統天皇ノ元年三月、新羅國ノ投化人十四人ヲ下毛野國ニ居シテ、田宅ヲ與ヘテ業ニ安セシム、同三年四月、新羅國ノ歸化人ヲ下毛野國ニ居ラシムトモ記シタリ、然レバ持統ノ元年ヨリ四年ニ至ルマデ、新羅國ノ投化人ヲ當國ニ置レタル事知ラル、今那須郡芦野駅ト伊王野邑トノ間ニ唐木田村ト云所アリテ、古ハ唐來村ト唱シト云、此碑在ル所ヨリ三四里許北ノ方ナリ、按ズルニ其時投化人ヲ置レ所ナルベシ、然レバ彼投化人等國造ノ厚恩ニ依テ命ヲ助ケラレ、其恩ヲ報セシト國造ノ薨セシ時、其子等ニ代リテ墓碑ヲ作リシモノナルベシ、其頃三幹ノ制度皆唐土ノ風俗ヲ受ル故ニ、唐ノ年号ヲ用ヒタル事知ラレタリ、然レトモ正統ノ年号ヲ用ヒズレテ偽朝ヲ用ヒタル誤ハ、武則天先帝ノ高宗威ヲカリ、中宗ヲ蔑ニセシ勢ヒニ三幹モ屈伏シ、新羅王政明ト云者使ヲツカヒシテ唐礼ヲ以テ、武則天乃チ是ニ吉凶ノ礼ヲ賜ハル事ナレバ、新羅ノ唐武ニ後ヒシハ勿論ナリ、皇朝ノ碑銘ニ唐ノ年号ヲ假用ヒタル誤ハ斯ノ如シ

歲次庚子年正月二壬子日辰節物故。

庚子ノ年ハ文武天皇ノ四年ナリ、上ノ持統天皇ノ三年己丑ヨリ十二年ヲ
經ルナリ、此時唐土ハ武后ノ久視元年ナリ、然ルニ是ニ久視ヲ用ヒサルハ
彼投化人等ハ持統天皇ノ元年三年四年ニ來ル故ニ彼地ノ年号ニ垂
拱永昌天授等ノアル事ハ知リタレド、其後ノ事ヲ知ラザル故ニ國造ノ
薨ゼレ時ニ年号ヲ畧セシナリ、皇國ノ人ノ作リシ文ナラバ、始ニ永昌ヲ假
用フレバ、薨年モマタ推求シテ唐土ノ年号ヲ用フベキ筈ナルヲ、是ニ其事
ナキハ皇國ノ人ノ文ニアラザル證據ナリ、投化人少シ許華ヲ取リテ文ヲ作
ルトイヘドモ、刑余ノ細民トイヒ殊ニ那須ノ草野ニ潛ミ居テ、何ヲ以テカ唐
ニ久視ト云年号アル事ヲ知ルベキ故ニ畧セシナリ、

意斯麻呂等立碑銘德云尔。

意斯麻呂ハ國造ノ子息ナルベシ、等ト云時ハ人ニアラス、兄弟數多アリテ亡父ノ為ニ碑ヲ立ルニ投化人ヲ以テ文ヲ作ラシメ、其德ヲ銘セシメタルナリ、今碑アル所ヨリ五六町許東方車塚ト云古墳アリ、國造ノ墓ナルベシ、

仰惟殞公廣氏尊胤國家棟梁。一世之中重被貳

照一命之期連見再甦碎骨現髓豈報前恩

是投化人トモノ國造ノ恩ヲ謝スル辭ナリ、新羅國ニテ罪ヲ犯シ死刑ニモナルベキヲ、皇國ニ投化セラレテ艱難辛苦シテ飢渴ニセリ命ヲ絶ント覺悟極メシ身ノ思ノ外ニ國造ノ寛仁ニテ田ヲ賜ハリ宅ヲ受テ飢渴ノ患モナク、此地ニ居息スル事、暗夜ニ再ビ月ノ照ス如ク、黄泉ヨリ重テカヘリタル心中シテ、國造ノ恩ノ厚キニ、縱骨ヲ碎キ髓ヲアラストモ、此莫太ノ恩ヲ報セント云ナリ、

是以曾子之家无有驕子仲尼之門无有罵者

此三句ゾ此碑文ノ第一ノ要文ナル、是ヲ以テトハ、國造ノ德ヲ称スル文ヲ受テ云辭ナリ、上ニ云如ク仁德深キ人ナレバ、其家ニ生育スル子弟ノ類マテ教カ行ワタリテ、曾子ノ家ニ親兄ニ背ク驕子ナク、又民ニ恩沢ノ行ワタル故ニ其下ニ住ム百姓モ、孔子ノ門人ノ孔子ヲ慕フ如ク、其父母ノ死タルヲ悲ム如ク、國造ヲアレサマニ罵シル民ハナレト云ナリ、此三句ハ孟子ニ依テ作リシモノナリ考アハスベシ、

行孝之子不改其語。

孝ヲ行フトハ意斯麻呂等ヲ云ナリ其語ヲ改メズトハ孔子曾子ノ語ヲ守リテ亡父ノ葬祭ヲナス礼復初ニモ其教ヲ背カサルヲ云ナリ

銘

銘トハ碑文ノ終ニ必ず有事ニテ其徳ヲ稱シ古詩ナドノ如ク韻ヲ押作ルナリ多クハ銘曰ト書ク事常ナルヲ銘トノミ書テ曰ノ字畧セシハ百五十二字ヲ八行ニ書テ一行ヲ十九字ツクニシタル故ニ曰ノ字ヲ入ルトキ文字アマリテ納リガタキニ依テ銘トノミ記シタルナリ以下銘ノ文ナリ

乃老心澄神照乾大引童子意香助坤作

大ハ吐卧反作ハ則固ノ反ニテ共ニ箇ノ韻ナリ乃ハ汝ト同シナリ訓ス則國造ヲサスナリ引ハ導ニ同シクミチヒクト訓ズ此句乾坤ヲ以テ國造父子ニ喩ヘシナリ易繫辭曰ク乾知大始坤作成物トアリ此語ニモトツキテ乾大坤作ノ文字ヲ置シナリ其意ハ國造ノ老心清澄ナル其精神

大ハ韻屬而徒蒸切也又連類切也又箇韻而吐切又唐佐切也

人ノ父タル道ヲ盡ス事猶乾道ノ大ニ萬物ヲ始ルガ如ク其童子子弟ヲ教道スルノ意香ハレク猶坤道ヲ助ケテ萬物ヲ興作スル如シトナリ

從之大人言喻守故無翼長飛无根更固

以上四言八句ナリ國造已ヲ慎ミテ子ニ教フハ是ニ從テ大ニ和合スル故ニ言ヒ喩スモ皆故ヲ守テ是ニタカフモノナレト云ナリ管子ニ曰ク无翼而飛者聲也无根而固者情也トアリ此語ヲ用フル意ハ國造ノ德行既ニ斯ノ如クナレバ其聲四方ニ傳播シテ隱レナク其情子孫ニ至ルマテ是ヲ受テ堅固ナラント云ナリ

山内董三云ト小舉ノ説の中ニ鈴木沢民ガ此碑ハ投化人の書ト云ル考訂あるに似たり琴臺ガ三幹ノ罪人ある時ハ皇朝史を撰じしに三幹の國古ハ七國あり日本附庸の屬國ト云三年ハ一度の貢朝使來り來朝せしむ征討使を遣はして征伐を定例を其頃三幹甚乱れ互ニ相攻伐以百濟ハ日本諸王ト云ハ般化ハ化トハ德化風化の化ト云自國の暴乱死

續日本紀高野天皇紀百濟王敬福武御守等始黃金等而

厭ひく皇國の王化不投いともと投化人といふ罪ありて竄逐せらるる義不いちるび百濟王敬福の如き投化人とも徳行の君子ありて陸奥守に任ぜり類も多しといふ事も然ありまじく此注解の附會の説多し投化の書紀不才ノツカラマキクとあり

新井白石同釋

白石名璵字君美姓源号白石通称勘解由任筑後守叙後五位下

永昌元年朱鳥四年也朱四二字上頭一點皆碑面剥落之跡耳據史持統三年歲次己丑實朱鳥四年也明年庚寅正月朔持統即位先是無改前朝之號盖以其攝也

飛鳥淨御原大宮據史持統尊號稱曰藤原大宮

而稱飛鳥淨御原大宮亦無改前朝之號也

那須国造那須國造也按國造本紀景行之世始置那須國造焉

追大壹案史天武十四年正月更改爵位之號某諸臣之位正位直位勤位務位追位進位每位有大廣各四階凡二十四階

那須直那須直也姓氏錄云直者謂君也古有直姓者皆是也天武十三年十月更改諸氏族姓以

為八等曰真人曰朝臣曰宿祢曰忌寸曰道師曰
臣曰連曰稻置而國造直姓者無改本姓也。
韋提人名也。韋猶天武紀韋那公商見之韋也。提
猶欽明紀膳臣巴提便之提也。

部督未詳按史崇神四十八年以皇子豐城命令
治東國景行五十五年二月拜豐城之子彥狹島
王為東山道十五國都督蓋嚴封也。王將就國中
路病薨百姓悲王不來竊盜其屍葬之上毛野國。

明年八月乃命王世子御諸別王專領東國世子
克繼前業以善政聞蝦夷率服盡獻其地邊疆又
安於今子孫猶在東國云考姓氏錄豐城之後凡
二十八姓皆出自上毛野下毛野等國焉。那須直
蓋是豐城之後復嚴舊封拜都督之命乎。然則評
督之評當是都字都督舊讀與大宰同。又按欽明
紀地名背評讀云邊郡蓋古訓也。評督猶言郡宰
也。郡評字似史碑皆訛亦未可知也。繼體紀廿四

年文云。迎討背評注云背評地名亦熊備己富里。
日本紀通證云評與郡同訓見繼體紀評督領見
延曆儀式帳。梁史新羅傳云俗其邑在內曰喙評。
太神宮儀式帳云難波朝廷天下立評櫻安身按
曰續日本紀卷一才十三評督訓古保利乃乎佐同廢
帝天平寶字八年紀冰高郡作冰高評以上諸書
考之郡評二字古通用可知。
歲次康子年文武四年也。

辰節祢故辰節猶言辰時也祢故物故也蓋言某
年某月某日某時卒也。

意斯麻呂意斯人名古者以意斯名頗多麻呂古
男子通稱蓋是其僚屬也。

銘德銘德也。

殞公殞亡也猶言亡君也。

廣氏尊胤廣氏蓋謂廣來津公也姓氏錄曰豐城
命三世孫赤麻呂依居地稱廣來津公。

一世之中重被貳照一命之期連見再甦蓋謂其於國人有再造之功也。

山岡俊明云國造雖姓名未可知而天武帝時貴次公子也故有廣氏尊胤言蓋或為大友皇子之黨天武治平之後必見擯斥迨持統之朝蒙赦再任故有提許督被賜及一世之中重被貳照一命之期連見再甦之文

嫡子驕子也。

不改其語不改其道也所謂三年無改於父之道也。

鈞葭堯心維葛堯心也鈞或雖字。

澄神照乾凝神照乾也。

六月童子云見童子也六或亦字。

意育助神意育助坤也意憶古字。

作徒之大作徒之夫也。

合言喻字合言俞焉也猶言俞曰也。

無翼長飛元根更固無翼長飛无根更固也。

跋那須國造碑

右那須國造碑貞享中故常山源義公之封内摸

而傳之乃建碑亭且置守戶碑已埋沒九百九十
餘年而復見于世矣嗟夫物之顯晦固各有時耶
美今所得一本傳摸補足非其真者恨未見石本
也其跋曰元年上二字不甚分明乃摸印見之永
昌二字也然本邦無永昌號焉飛鳥淨御原天武
朝也天武有朱鳥號永昌字形稍似朱鳥想是歲
月之久字體訛缺也因推為朱鳥歸後考之朱鳥
元年歲在丙戌而此曰己丑則非朱鳥也明矣今

跋曰云云
以下假用異
城年号乎
考之佐奈
澤云所
既前
有

按唐武后永昌元年歲在己丑而當持統三年此
時本邦年號闕故假用異域年號乎美竊疑以謂
維我東方建國已來未始有稱蕃異邦奉其正朔
者也偽朝之號亦何以假為若其果然則文武四
年只用甲子何也以余考之或以為永昌元年者
即是朱鳥四年也持統稱制無改前朝之號蓋以
其攝也據史持統四年庚寅四月朔始即天位亦
是以徵矣歷代縣遠文多刊缺不可盡解但其四

字僅存三畫而右旁轉折處隱若挑勾勢上頭一點乃是剥落之跡遂使觀者以為元字耳越人以為見楚人以為馭孰知鴻飛冥々哉美嘗聞之孔子曰惟器與名不可以假人魯仲連齊國一男子欲蹈海而死義不帝秦之故也堂々天朝豈復以異域年號哉美學淺陋性且不好臧否人物雖然事之關係則重矣大矣敢不得不辨

享保辛丑秋七月二十一日 源君美書

伊藤長胤輜軒小錄

仁齋長男名長胤字原藏号輜軒又東厓住京都堀河東厓卒年六十七云

今ヨリ四五十年許モサキ野州湯津上村ト云所ニテ里民地ヲ堀テ一ツノ方石ヲ得タリ寫ノ本紙ヲ見レバ高廿尺二三寸幅九寸許凡テ百五十二字ナリ辞古拙ニシテ分明ナラス糸鳥ト云人アリ又永昌ト云ム者アリ永昌ト云ガ大カクチカキ由云リ然レドモ唐ノ年号ヲ用ルコト不審ナリ殊ニ元年四月トアレバ唐ヨリ日本ヘノ通路京ヨリ野州マテノ路次數千里ヲヘテ頓ニハ達シガタカルベシ云ク

長久保赤水同釋

赤水名玄殊字王父号赤水水戸之講讀也本姓大友其先出自駿州長久保住于水戸領赤濱

是ハ赤水東輿紀行ノ載ル所ナリ前文何ヤトシトシ佐々宗淳新井白石等の云所ニ等シクハバカクヨ略シ

永昌元年己丑四月飛鳥淨御原大宮那須國造

追大壹那須直官名韋提都督被賜歲次庚子年正月

二壬子日辰節物故意斯麻呂等立碑銘德云尔

抑惟殞公廣氏尊胤國家棟梁一世之中重被貳

照一命之期連見再甦碎骨飛髓豈報前恩是以

曾子之家无有驕子仲尼之門无有罵者行孝之

子不改其語詢芻蕘心澄坤照乾亦兒童子意育

助神作徒之大合言喻守故無翼長飛无根更固

礼記玉制ニ
至古周尺八尺
ヲ以テ歩トス
今夏尺六尺
四寸ヲ以テ歩
ト周尺八尺
ハ夏尺六尺四
寸ヲ以テ歩
ト曲尺五尺二寸
餘ヲ周尺
八尺六寸四分
ナリ

安藝人廣瀬教元云白石翁の考の如く永昌元年ハ朱鳥四年也事
疑あるべし但一六月童子ハ六尺童子トイハルベシ論語亦
以託六尺孤とある六尺ハ曲尺三尺八寸四分ありされハ十三歳許の童
子をいふなり三國志ハ孔明が呉の使に對して五尺童子知
と云五尺ハ則曲尺三尺二寸の事なりトイフベシ考

狩谷望之古京遺文ト望之字卿雲号掖齋江戸湯島人通称
津輕屋三次天保六年閏七月四日没

蒙齋曰蒙齋名貞幹氏藤井永昌元年當作朱鳥四年

云好古小録此說似可信朱鳥四年五年六年七年

見萬葉集朱鳥七年見靈異記不得據史斷言朱

鳥之號僅一年也

飛鳥浄御原宮。天武天皇所營帝崩持統天皇嗣
御是宮。至八年朱鳥始遷都於藤原故碑謂持統
天皇之時猶稱浄御原大宮也。

猪名大村墓志所云後清原聖朝即是也。少納言正五位
下威奈真人

諱大村卿

墓銘ナリ

康子即庚子係文武天皇之四年庚ナル作康又見伊

福吉部氏墓志

伊福吉部德足比賣臣和銅三年康成冬云ト
アリ姓氏録ニ五百木部トアルモ同レ姓ナリ

弥故猶言病死弥字旁从夕下文殞字同。

偲訓志奴布思慕其人之義萬葉集多用之盖是

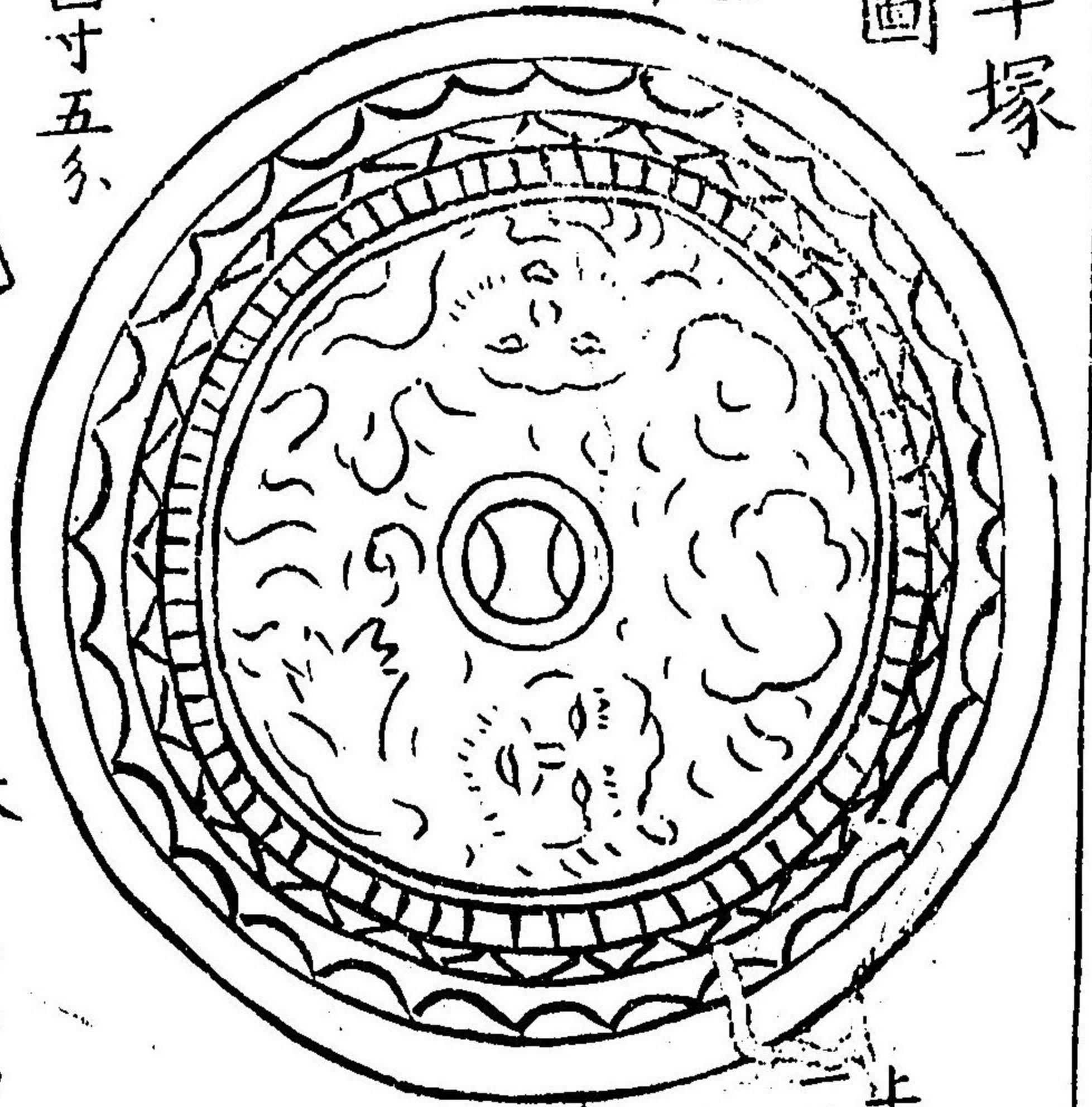
間會意字。

右の説ども得る所得ざる所あやとんど大槩は悉くその
中小年號の説は白石翁の考をたゞめ望之の擧ぐる考證の如く
そそ朱鳥四年を事論ありされど猶不改其語とあるより以下ハ
白石翁ハ維菟薙心ト赤水ハ詢芻菟心ト
琴臺ハ是を銘ありといひ乃老心澄たりと云ふハ心のおもひ
く方小引つゞくをれば何れと是と定めざれば正しき據りま
りの強て訓づらばて此碑ハ皇國第一の古碑なり第二上野國
多胡郡の碑にて是ハ元明天皇の和銅四年より第三小國緑野
郡金井沢の碑なり是ハ聖武天皇の神龜三年を第四大和國
添上郡元明天皇の御陵の碑なり第五陸奥
國宮城郡多賀城の碑なり彼天平寶字六年於てとも千歳を経
一碑あれ世小あらしきものなり

出自上車塚
器物之圖

鏡 赤銅色
徑三寸五分

背



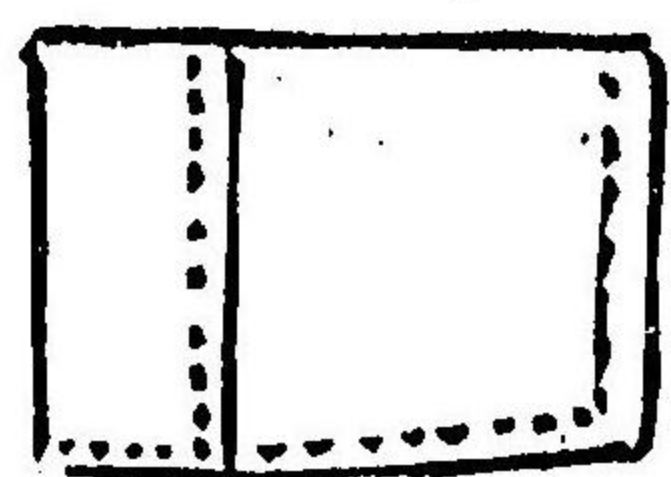
上徑一尺

花瓶 奥朱色
高九寸

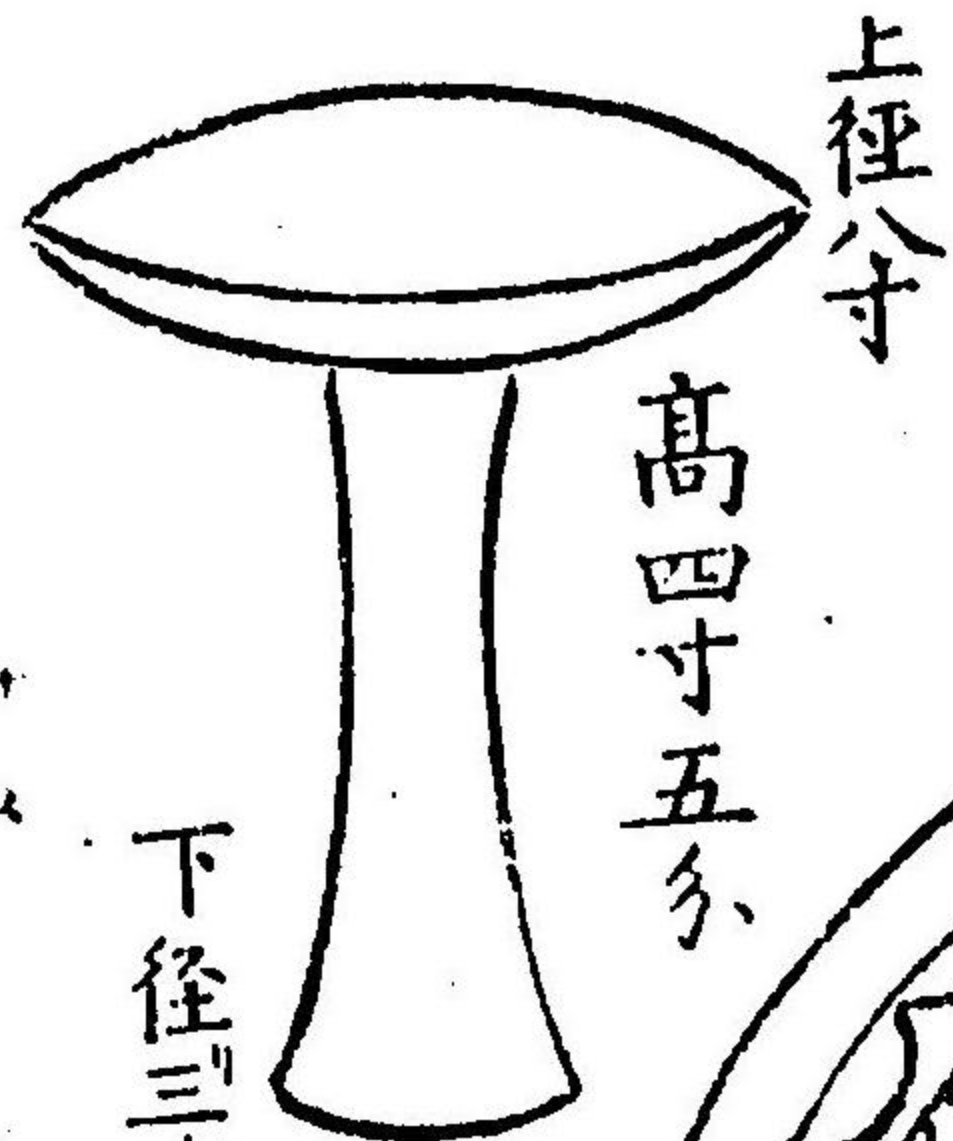


腰細周
一尺四寸五分

鎧破
十六枚



太刀ノ折十五本

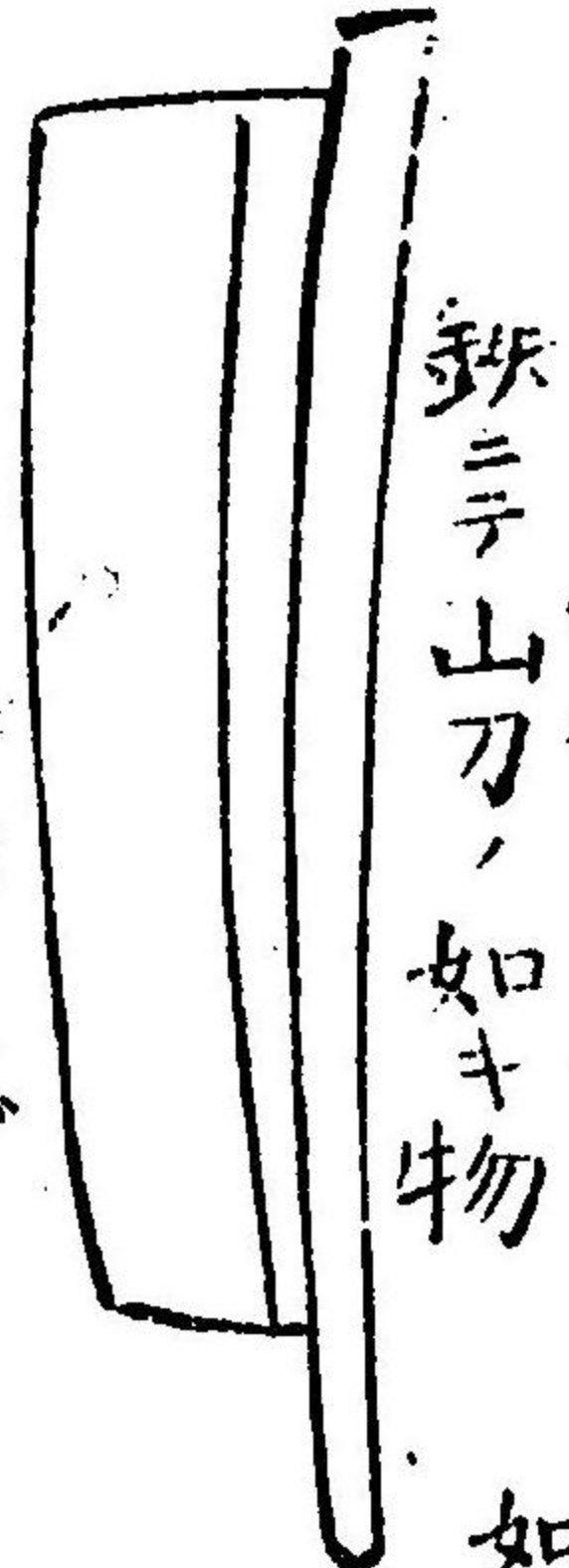


上徑一寸

高四寸五分

下徑三寸五分

鉄ニテ山ノ如キ物



赤クサヒタリ

如キ
シホテ

鉄ニテ如此物

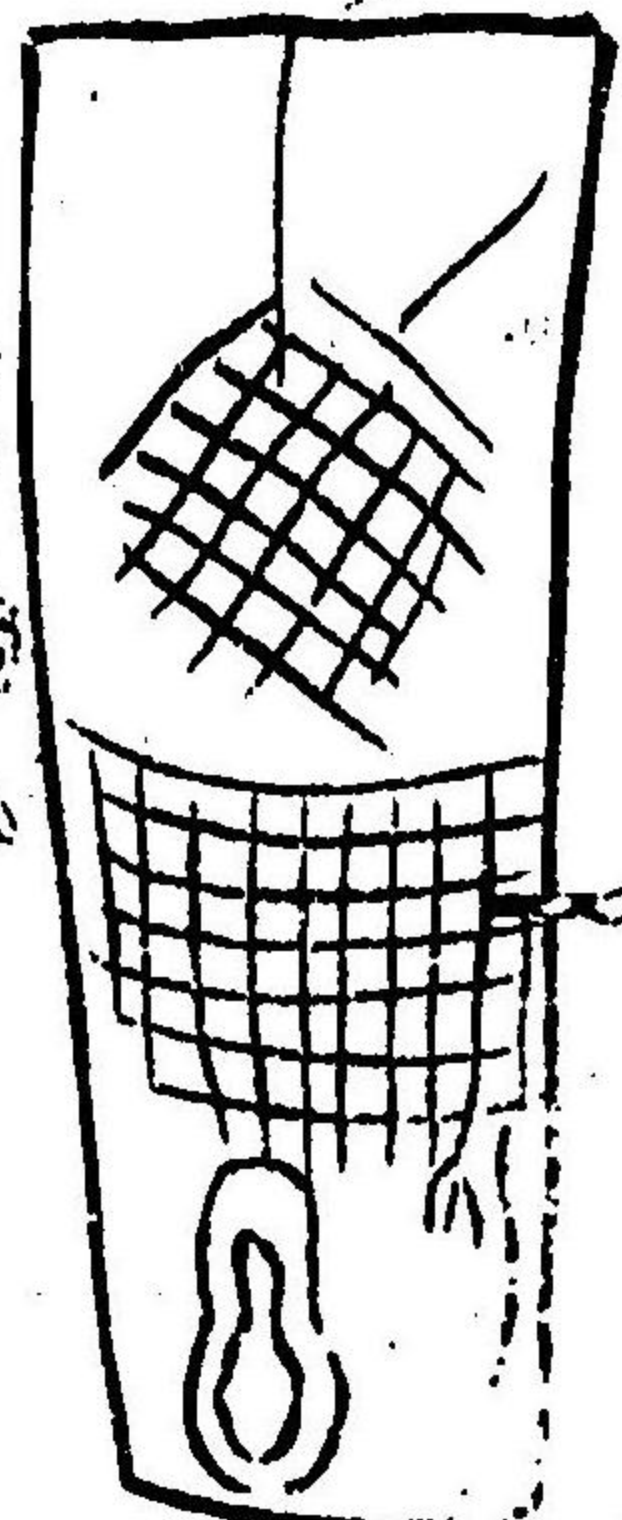


鉾ノ折ノ如キ物

赤クサヒタリ



太刀ノ折ノ如キ物 赤クサヒ

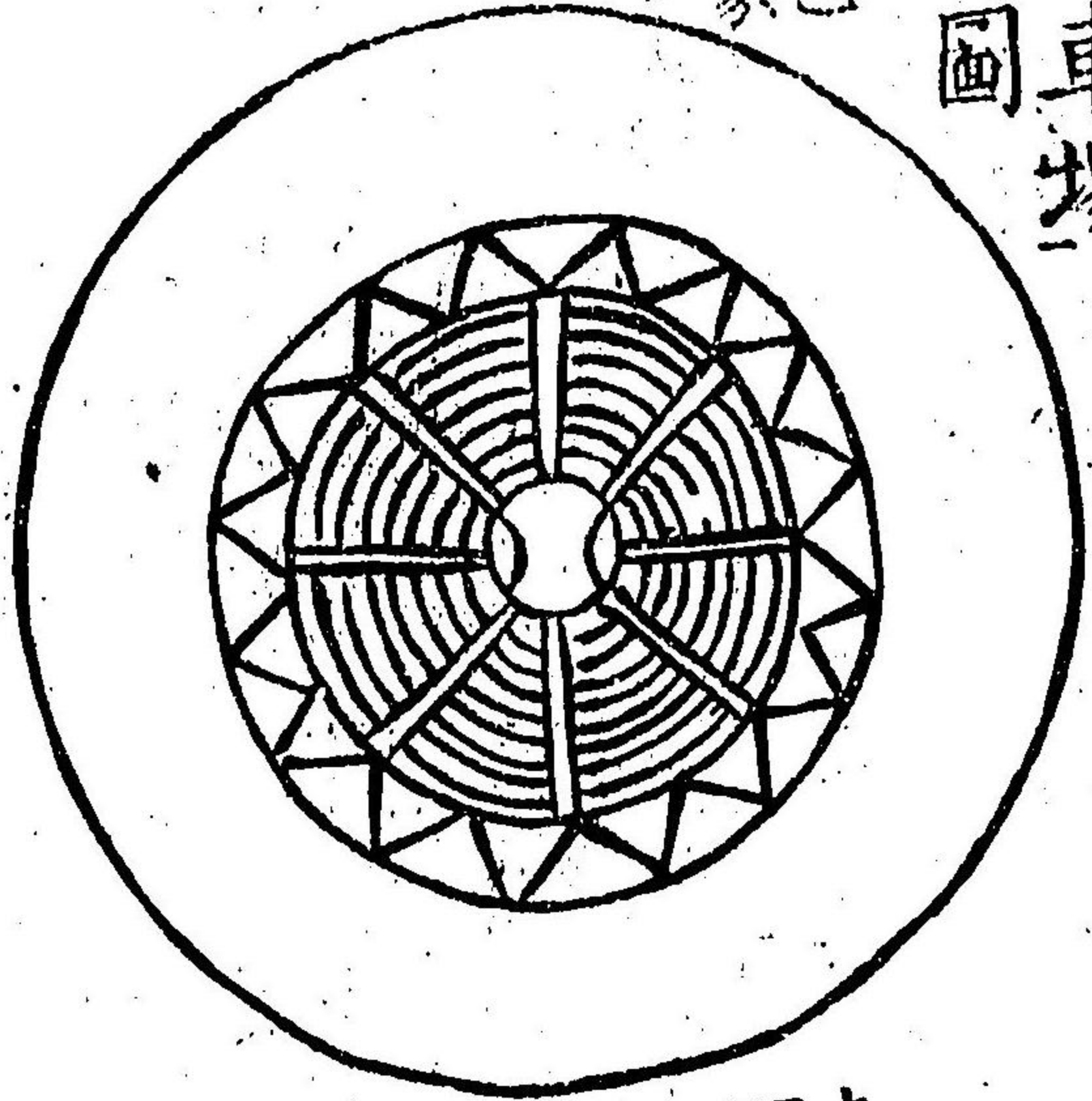


衣ヲ巻タル如キアトアリ

出自下車塚
器物之圖

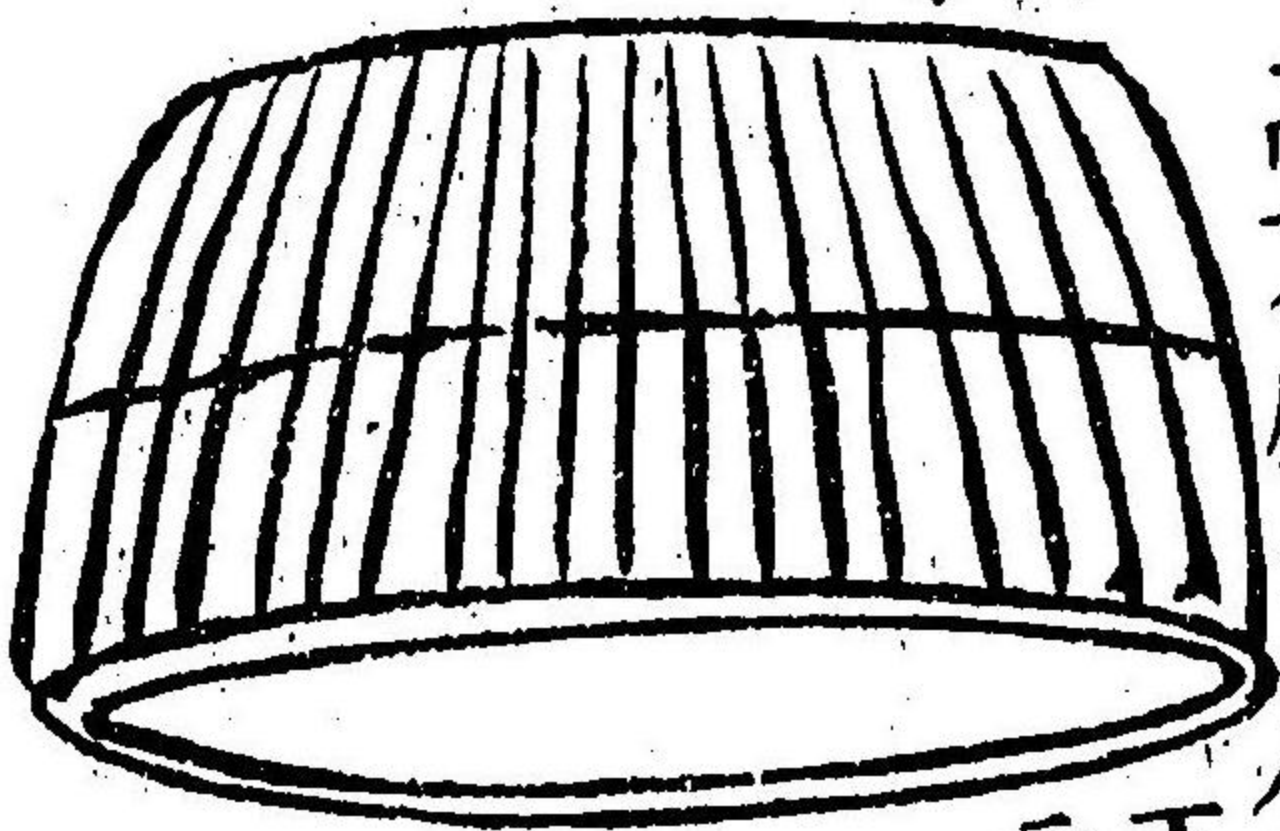
鏡 赤銅色
徑三寸五分

背



上徑一寸五分

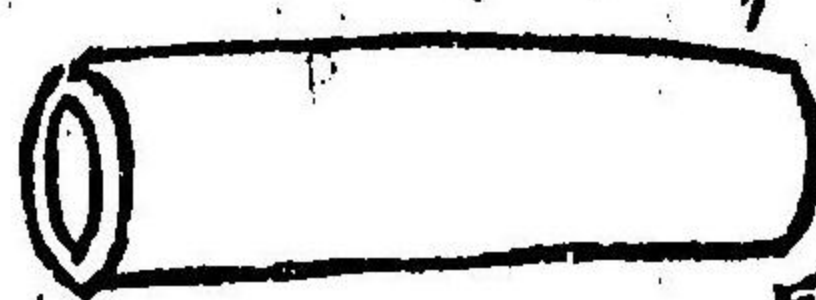
焼物ニト色
高七分厚五分



底ナレ

下徑二寸

焼物管
長一寸



葦ノ軸
大サナリ



大矢根一本 長三寸



廣一寸五分

矢根大本

長三寸四分周四寸



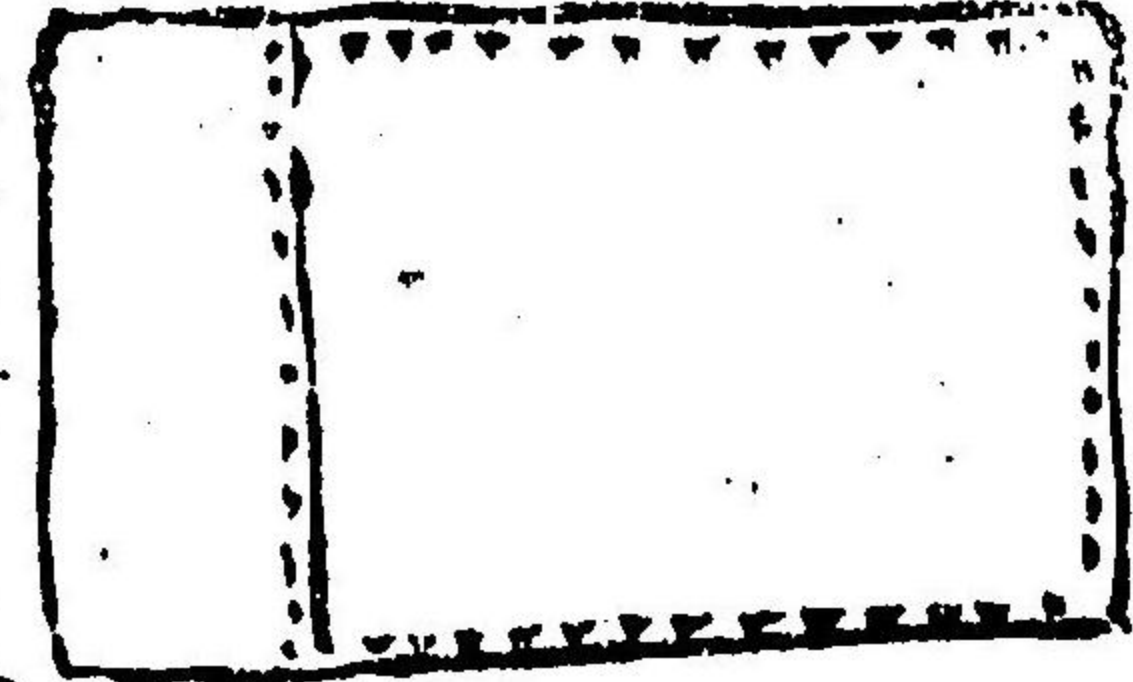
鉾ノ如ク見エテ描ノ足ニ似タル物アリ 中ニ穴アリ

鎧板



二寸八分

四寸五分赤クサヒタリ



鎧板

此外破廿二枚太刀折一本

車塚

同所の中川の西岸ふあて、但し二所ありて一所は國造の碑在る所を、五町許東南の方なり、高二丈餘りて南北廿間許、東西廿五間許、前の方小堤の如き築出し十五間許あり、一所はそより一町許猶南の方ふあて、高三丈餘りて南北三十間許、東西廿八間許、前の築出し廿一間許あり、北の方より下と唱ひ、南の方ふあてをよと呼ぶ都の方よりついでを云ふや、其外此形ふ築しる小塚ありて、件の上下車塚を、元祿五年壬申六月廿三日、水戸黄門光國卿下向ありて、堀をぐるを見給ひ、右の如の器物出るを、畫工よあてて其圖、たづねせ、元の如く封して藏り給へ、是則那須國造の墓所あり。

鑑真大和尚碑

河内郡藥師寺村龍興寺の境内ふあて、高五尺餘りての石塔あり。

鑑真大和尚天平宝字七壬寅五月五日と彫付より、鑑真大和尚、唐の揚州の龍興寺の沙門とて、俗姓は淳于氏、揚州江陽縣の人にして、聖武天皇の勝寶六年皇國よ来て、南都東大寺筑紫觀音寺、下野藥師寺よ、三の戒壇を建立しより、委しく上の卷の藥師寺の条よ記しより、碑のうしろふ菩提樹二本あり。

弓削道鏡墓

同所ふあて、高二丈餘りの塚あり、但しそより北石塔あり、道鏡は俗稱弓削氏とて、河内國の人なり、孝謙天皇の寵を蒙りて、大政大臣禪師よ任じ、天皇崩御の後、造藥師寺の別當よ成り、當國よ下り、光仁天皇の寶龜三年壬子四月死と、續日本紀よ記しより、是より委しく、藥師寺の条よあて。

鐵塔婆

河内郡宇都宮駅清巖寺の境内ふあやりの同所東勝寺に
 を慶長二年彼寺破廢の刻當寺よりついでと云三輪塔波と高
 一丈と八寸六分幅一尺厚と二寸重とありお上の方より三尊佛を鑄
 付あり中央弥陀一尺脇土觀音勢至各七寸其上の方より梵字二字あり又
 佛像の下より文あり字數百廿七字ありついで云塔波と空堵波と云ハ
 梵語なり翻譯名義集より空堵波此方墳又圓塚又高顯義ハ
 靈廟ト翻とあり歡長上人の云三輪塔ハ法報應の三身なり青白金
 の三色を表し無邊の功德と云撮はといなり

鐵空堵波五分一縮圖



智廣の悉曇字記小智短伊字上聲聲近於翼反別體作^品と記
しり具の^ハ梵文の始よ^ハ例なり^ハ悉曇十
八章建立第三餘單章を考ふ^ハ此章を餘單と称す^ハ
能合のし字を半躰の囉字と定め^ハ餘單と云たり是を^ハ如字
の下に加へ^ハ如此作りて^ハ迦囉と呼ぶなり是の^ハ伊の半躰を加へ
ま^ハ迦伊囉伊と^ハ迦伊の反機囉伊の反釐と^ハ反して^ハ機釐や
か^ハ則^ハ如斯是^ハ涅槃点を加へ^ハ如斯作りて^ハ機釐矩と呼
ぶ^ハ下の文に彌陀の種子とある^ハ此^ハを^ハ囉字より扁を添
て囉^ハと^ハ梵學家より^ハ彈舌音と^ハ舌を^ハ彈きて^ハ呼ぶ^ハ

ハ 栞白道一肘間 夫丹者四思之先也 孝者百行之源也 曰茲當二十
炳現阿字素光^ク二^ノ景^ノ平^ノ都^ノ婆^ノ之^ノ冶^ノ鑄^ノ弥^ノ陀^ノ之^ノ種^ノ子^ノ三^ノ而^ノ之^ノ
禪智俱入金罍縛^ニノ^ハ利^ノ先^ノ善^ノ提^ノ明^ノ作^ノ諸^ノ佛^ノ之^ノ慈^ノ見^ノ早^ノお^ノ六^ノ之^ノ
言入如來寂靜智皆滅速生九^ノ法^ノ東^ノ平^ノ利^ノ益^ノ教^ノ白

正和元年八月

正和元年八月日孝子



八葉白蓮一肘間
阿字素光色
禪智俱入金剛縛
入如来寂靜智
右四句の偈ハ菩提心論の中
見たり

碑文考訂

夫母者四恩之先也孝者百行之源也因茲當二十三之忌景營
率都婆之治鑄弥陀之種子三尊之聖容等祈先妣之菩提
則仰諸佛之照覽早出六趣之苦域速生九品之淨臺乃至法
界平等利益敬白正和元年壬子八月日孝子
是、同所の井上信好が考訂せしを清巖寺の歡長上へ再び校
合して訓点を加へたり
さて此鉄塔波ハ宇都宮下野守貞綱の母儀の十三回忌に建立
しり、宇都宮舊記よきなり、宇都宮系譜ハ貞綱の父を

景綱入道蓮兪永仁六年戊戌五月朔日卒六十四歳と記し、
但し此率都婆の記しより正和元年より十三年以前は正安三年
より景綱滅後三年よりありて同じく系譜より貞綱の母秋田城
女義景を娶ひされど没年と法号と記し、そののち、
なきよりなり。

樋爪五郎季衡石塔

同所上河原橋の傍の高家の裏より、但し五輪の塔ニ基並びく
くく、東鑑より文治五年頼朝卿奥州泰衡追討の刻宇都宮大
明神小祈誓して樋爪太郎俊衡法師が一族を生捕り、宇都宮
の社職賞ふあると、こゝに、樋爪五郎季衡、其者
あり、大系圖より俊衡の舎弟季衡あり、俊衡の末子忠
衡と云あり、武家評林より、此忠衡を宇都宮社職と記し、
考ふ、宇都宮家の、
樋爪季衡の末孫なりと云、後孫同郡三軒在家村に今あり、

社職賞
あり生贄
なり

鴛鴦塚

同所大町と云所の中程の南側の商家の裏小あて、と古き六角の石塔小六地藏を彫付て建より、其傍より少しの流もあて、求食川と呼ぶ、其水上に求食沼とて二町許北の方なり、村老の物語に昔此邊は獵師あてて、或時鴛鴦の雄鳥を射とめ、つりたる首を射切て、軀のと得より、明る所、同一所とて、嶋鳥を射とめ、つりに其羽をひの下は、昨日の雄鳥の首をとり、抱きて、つりて、情知らぬまゝとて、男たれども是を見て、發心し、此所は埋て、ある所の石塔を建立し、つりて、さて、此物語は、無住法師の沙石集に載り、れど、彼集は、何所ともなく、されど、無住は、梶原景時の孫とて、宇都宮頼綱の室の甥なり、梶原一家亡び、後、當所は来てあり、故に、聞書せり、ものたれども、さて、同集は、安藤沼の北鳥の事も載られ、其ず、別の物語なり、然ると同一物語とて得て、此所を安藤沼なりと思ひ、濕る俗もあて、大なる誤あり、安藤沼は、同國安藤郡佐野天明駅小屋町と云所にあて、既に上の名所の

条に記し、れは、いふべきに見ゆ。

妙吉侍者石塔

河内郡寺内村より、宇都宮より一里許北の方とて、日光山の往還より百歩許西へ入り、高三丈餘りの塚の上は五重の石塔とて、高五尺許とて、正面は至徳四丁卯八月七日、聖金剛佛子、妙吉貞禪とて、四行よとて、左の方の平は、大工國行、右の平は、大工賢時とて、上の段は、梵字四字あり、但し一方は一字、四方は、正、面、は、四、字あり、右の平は、背、小、左の平は、背、小、是、は、ア、ア、ア、ア、と、唱へ、つり、を、い、ま、つ、ア、字、よ、を、加、て、ア、と、呼、び、こ、を、加、へ、ア、と、呼、び、こ、を、加、て、ア、と、呼、ぶ、あ、て、を、加、へ、塔の四方は、梵字なり、妙吉侍者、臨濟宗の僧とて、夢窓國師の法眷とて、夢窓は、當國那須の東山雲岩寺の佛國國師の法嗣とて、則、雲岩寺に、住居し、夢窓國師山居の跡と云傳へ、今、あ、り、妙吉侍者も、師小後、當國は、来、り、や、ま、い、當國の、あ、り、と、太平記に、妙吉

侍者ハ足利左兵衛督直義朝臣を勸め、上杉伊豆守重隆、島山大藏少輔直宗等と謀り、高師直師泰兄弟が奢るを懲り、亡さんや、
一々事々々々で上杉島山に却て遠流せし、妙吉侍者、遂電
して行方々々々々あり、其頃、貞和五年の事、此石塔の記、
至徳四年より三十九年以前なり、

筑後守平貞能入道墓

芳賀郡太平山の安善寺と云浄土宗の寺の境内より塚の上、地
藏堂を建て、其中小安善院室中大岩法師と記、位牌を安ん
則貞能法師の法号なり、貞能ハ平家の二族、小松内府重盛公の
寵臣なり、委しく上の巻に佛寺部の安善寺の条小記、

清水冠者義隆墓

同郡大羽村の野中江木林の中あり、清水冠者、武藏國入間川の

邊り、堀藤次親家が郎等藤内光澄と云者小討り、源平
盛衰記東鑑寺より、此所小墳墓あり、是ハ
阿野冠者時元の墓なり、後人誤り清水冠者と言傳へ、東鑑
小阿野法橋全成建仁三年五月十九日謀叛の聞え、依り常陸國
に配流せし、八田右衛門尉知家が為り下野國に於て殺せり、其
子阿野冠者時元、宇都宮四郎兵衛尉に預り、建保七年二月廿日
自害し、記、疑ひあり、阿野冠者の墓なり、然りと讀史餘
論ハ、阿野冠者時元駿河國に城郭を構へ、東國を管領、
を企つ、二位尼の仰りて、金窪兵衛尉行親等を討手、差向時元自
殺し、記、異説あり、猶考ふなり、

駿河國沼津
近在井内村
阿野細道と云
所ハ同村大
泉寺に阿野
全成の遺物
あり

赤松律師則祐墓

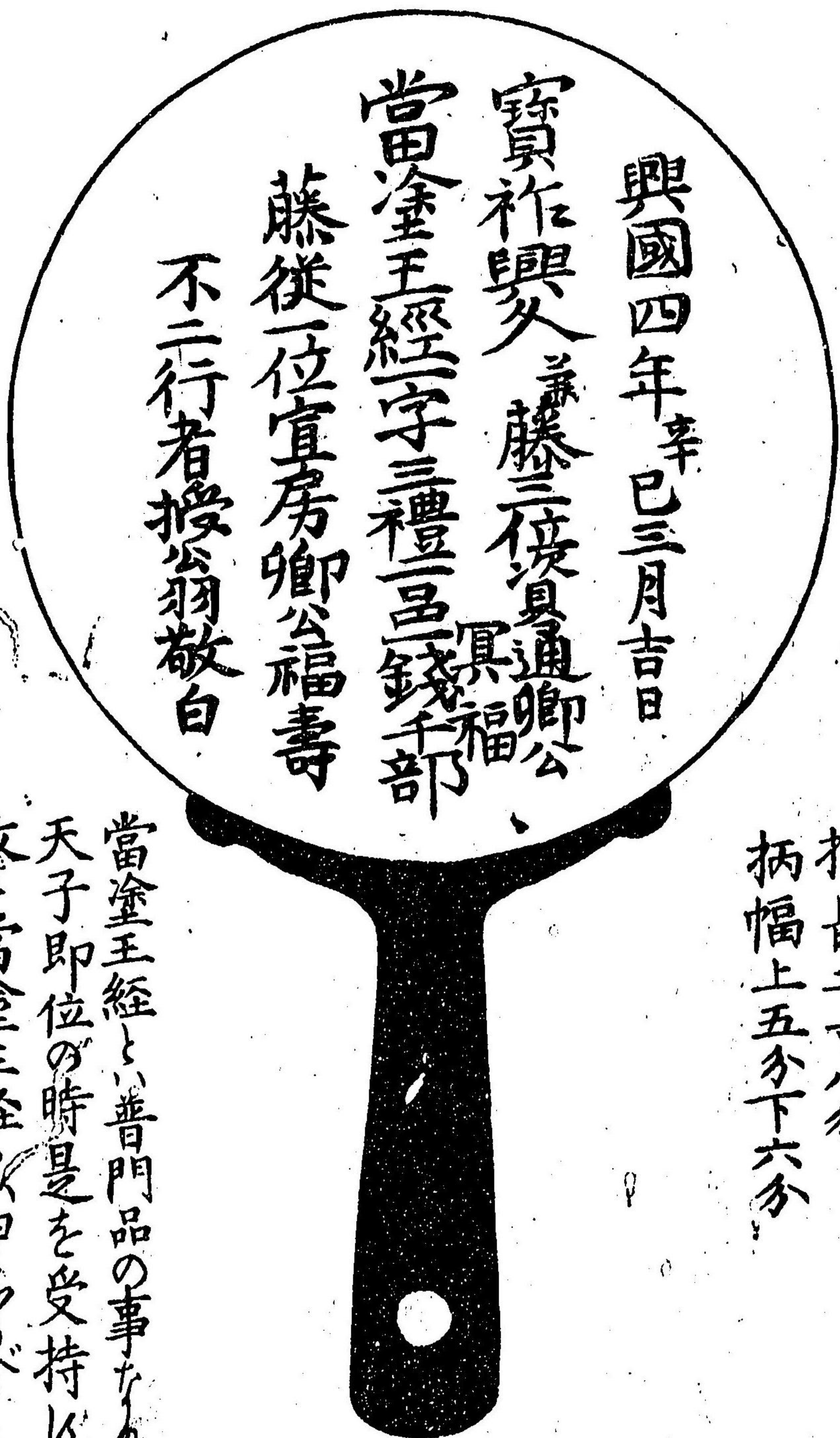
同郡祖母ヶ井村あり、五輪塔と唱へ、原中ね、傍に沼あり、其
底に五輪の石塔あり、西方遠江守貞泰同郡赤埴に在り
時、當所ハ領分、貞泰ハ則祐親友、依り、石塔

營を建て、其亡魂を弔ひ、のち則祐、應安四年辛亥十月卒
は、あやしく考ふなり。

万里小路藤房卿遺跡

都賀郡西見野村長光寺の境内菊沢と云所より、去明和四年
丁亥正月廿八日時あけ、霖雨して山崩り、る所より長七寸許の
銅塔一基、中小一寸七分の正觀音の銅佛入り、古鏡徑三寸八分
許、古錢九百七十六文出り、其鏡の面、當塗王經一字三禮一品一錢
千部寶祚興久兼藤三位資通卿公眞福藤後一位宣房卿公福壽興
國四年辛巳三月吉日不三行者授翁敬白と彫付り、裏に整衣冠尊
瞻視と云六字を鑄付てあり、る所より万里小路中納言藤房卿、藤後一位
宣房卿の二男として、藤三位資通卿の嫡孫、大織冠鎌足公廿七代の後
裔なり、太平記に藤房卿、後醍醐天皇の政道正しく、る所よりを歎息
し、連続して諫言申されども、御聞入なく、大内裏造營の事を思
召し、る所より蘭籍桂筵の御遊頻り、る所より建武二年三月十日幡行幸

出自菊澤山古鏡之圖



圓徑三寸八分
柄長二寸八分
柄幅上五分下六分

興國四年辛巳三月吉日

寶祚興久眞福藤三位資通卿公

當塗王經一字三禮一品一錢千部

藤後一位宣房卿公福壽

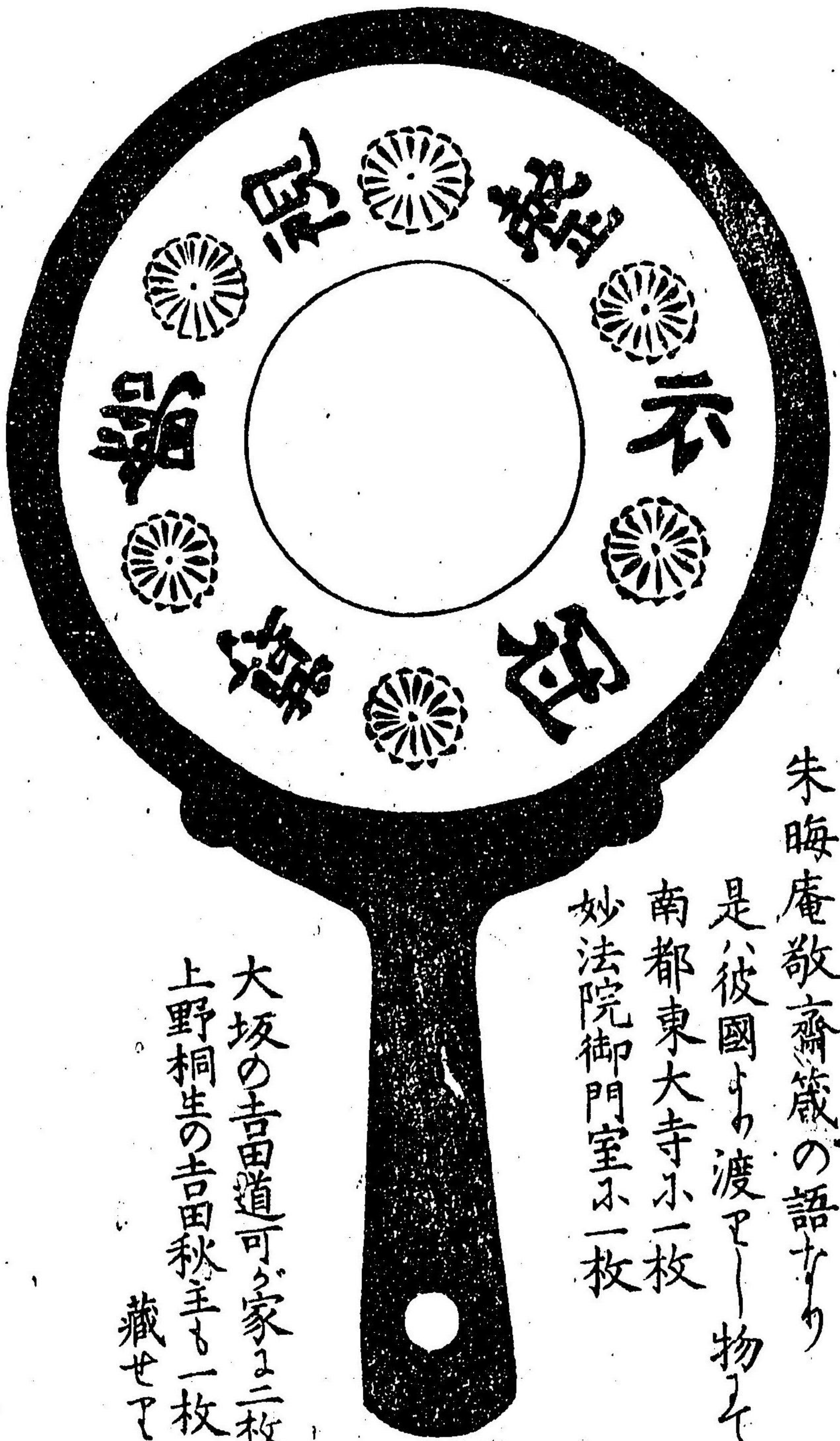
不三行者授翁敬白

當塗王經、普門品の事なり、
天子即位の時、是を受持り、
故に當塗王經、る所より申あり。

其背

整衣冠尊瞻視云ハ宋の
朱晦庵敬齋箴の語ナリ

是ハ彼國より渡りし物也
南都東大寺小一枚
妙法院御門室小一枚



大坂の吉田道可の家二枚
上野桐生の吉田秋生も一枚
藏せて

叶いあれは天のまに後世小あはれてかやまらるる

源信壽

の供奉を限りて北岩藏と云所は赴き不二方法一と云僧を
戒師とて遂小三十九歳して多年拜趨の儒冠を解十戒持律
の法躰と成給ひ

任持る山を後世の人とあはれやをの松よとていふ

と詠し給ひし棄恩入無為真實報恩者と云文の下は白頭望斷
萬重山曠却恩波盡底乾不是胃中藏五逆出家端的報親難
黄蘗の大義渡を題せし古き頌を書残して行方なきとあはれ
藤房卿道世の事公卿補任歴代皇記寺入建武元年十月五日
年三十九とあり是より後ふ

吉野拾遺より越前國鷹巢山にて新田の家臣畑六郎左衛門時能と逢
給ひ

このもまはるは人の心とていふは

と詠してまきり給ふと記しし禪林諸祖傳より洛西妙心寺関山関山國
師の法嗣授翁禪師は則藤房卿にて康暦二年三月廿日遷化八十五と記
しし此長光寺は関山國師の傍室折外藏司の法子超光藏司に
関基として折外和尚を関山と称し應安三年の草創なりと云ふ

臨濟をりしを享祿年中同郡玉田の瑞光寺八世妙極和尚住職以後
洞門とほりしは藤房入道の遺跡なり依りて光藏司長光
寺を開基せしと云ふなり委しき事彼北岩倉の靈玉律師の
書に日陰草と云ふのよき事なり是は文化十二年長月の上梓とて
不二坊の藏板なり一万里小路中納言建房卿の序ありて
事先進繡像玉石雜誌も康治の山口安良が押原推移録も載せ
り

尾藤左衛門尉知房墓

同郡小山駅の東裏の畑中小あり高四尺許の石塔なり正面より四州
讚岐前太守尾藤左衛門尉法幽院殿月山道樹居士天正十八年庚
寅八月十五日と記し其脇の方小施主尾藤金左衛門知則寛永七
年庚午八月十五日と彫付あり其前より石燈籠二基ありて
尾藤金左衛門尉知成宗祖父尾藤左衛門尉冥福明曆二年丙申
二月十五日と記しありはく尾藤左衛門尉の事武邊物語と云ふ

小尾藤左衛門尉知房は豊臣關白秀吉公の臣なり日向國高鍋の戦
不興を蒙り知行を没収せられたるに天正十八年四月小田原御征伐
の時東國より来て酒匂川の邊よりて謁し殿下大に怒らせ
給ひ即時討捨給ひし記あり今現に此所に墓あり
て之の石塔を建し彼所より豊臣殿下の當國
小發向し給ひしこと本朝通記東戦紀行寺に天正十六年庚寅八月
朔日秀吉進至下野宇都宮同六日伊達政宗歸順迎之那須野南
部信直亦來謁東州悉平秀吉在小山三日同十九日還京都といへ
又尾藤の息金左衛門知則は細川家より勤仕して三千石を知行し其
子孫今連綿ありては毎歳香花料三百疋同所千手院より寄贈り

猪苗代兼裁墓

同郡野渡村満福寺の境内小あり但し下総國古河城下より十餘
町西北の方なり兼裁は耕閑齋と号し其先は三浦
平氏より出て陸奥國會津猪苗代に潜居を依りて猪苗代兼裁と云

和歌を堯孝小學びく法橋小叙以後年古河公方政氏朝臣の師範
とたりて古河城内に住し永正七年庚午没し兼哉墓所に櫻を栽
て兼哉櫻と号しありとぞ

宗長が東路の裏より永正六年文月まひ佐野の館より五日ありあきて
會つて兼哉は坂東道五十里許なるごとく下総國古河と云所より勞
の事ありて江春庵とて關東の名醫そのくして療治ありて文ある
そとていく申す侍り中風して手あはれ身をやすむとて返
事ありていと記しありて佐野の館とありて安藤郡唐沢山や
云所より古河より今道八里許ありて六丁一里ありて四十八里あり
寛文の大きき宮に撰せ給へ集外三十一歌仙ふ兼哉
秋あくくをめまの尚の管人いましりれならむとらると糸

國産名物

毛氈

延喜内藏寮式カモト十枚下野國所進とありて同民部式交易雜物カモト
あり中より下野國交易氈十張とありて古こ好毛席カモトの出来カモト故
小毛野國と名つけたり都賀郡三カモト毳山カモト氈の出来カモトゆゑの名れを
委カモトしカモト始の卷の國名の糸小舉カモトなり

砂金

内藏寮式カモト砂金百五十兩下野國所進とありて民部式カモト砂金百五十兩
練金カモト八十四兩とありて八雲御抄カモト金の部カモト那須の淘汰金カモトゆカモト續目
本後紀カモト小承和二年下野國武茂神奉授後五位下此神坐採沙金カモト之山
とありて那須郡カモト今武茂の神社あり其邊カモト金洗カモトと云所カモトなり
あり歌枕名寄カモト那須のゆカモト歌二首あり名所部小舉カモトなり

下野國誌上

調布 附真岡晒布 足利染物

内藏寮式小調布三百六端下野國交易と云え民部式小調布一千四百廿六端南布七千三段たもとそより今も真岡晒布最上品と云く其名高し但古の調布は麻にて今の晒布は木綿をれどもさききき事ハくさるるもれりしは染物は足利の名物なりし吉田兼好が徒然草に最明寺入道殿鶴が岡社参のついでよ足利左馬入道の許へ立いらるる云く足利の染物と云もれ候と申され候は用意して候云とあり

牧馬

兵部省式小下野國朱門牧馬とありけり朱門と云所は今いれ山口安良云朱門は朱間の誤字とて都賀郡赤間ありと云りきり右大将頼朝卿の口より生食磨墨と云名馬當國彦間の牧より出るといひ彦間ハ安藝郡なり或人ハ朱門ハ彦間の誤なりと云然らば彦間ハも足馬の義なりハ天皇は奉る馬と云義とて彦馬とてありんか牧村も

引馬野遠

都賀郡より考合はる

下毛草

都賀郡日光山すい那須野其外所々の野原も多しあり上代當國は始て生る故下毛草と云ふべし常山木ハ唐土の常山と云所は始て生ぜり故に名を負ひ類ひありさて此の二種ありて一種は木下毛と云其木木瓜馬醉木の如く一種は草下毛と云其葉鳥の如くうへで似たり是ハ年々生ば花はいつくもひくてもある事なり陸奥にてハカコ草と云ふ越路とてハトリ草と云ふも葉の形鳥の跡に似たりハナリ其根を製薬ハ強壯劑驅虫劑等ハ用ゆる小功能あり宇田川氏の和蘭藥鏡ハ漢名纈草和名春女郎花蘭名ハレリヤアナと記しるも則是ハ其貝原萬信ハ日本釋名ハ下毛草初夏發細紅花ハ朶群開如敗醬と記しつり清少納言の枕草子ハ草花ハ云とある条にちもつひの花載せくあり最なる花なり若萌のうら摘てつ物ハ物ハ味ハ甘美なり

大和本草よ、日光下毛草、
花紅而美、又有白花者、
山下毛花淡紅とあり、

木下ツケ

蠻語箋よ、纈草、

フアレリマーン

Belamcandaと記しあり、

草下ツケ



拾遺集

物名

植くアラス君たふきぬまを我の家よ。アハんまのあき

散木集

物名

心でもあやうさせん花んさとわ。アハぬらうせは

うらうら花

物名

咲よ。も。アハぬらうせは

倣古追詠

東下野守常縁の賛 藤原春村

志もアハぬ花のあるふひの

日光黄連

日光山中に生じ、最上品なり、和名カクミクサ、本草綱目釋名よ、時珍曰、其根連珠而色黄故名とあり、カクミとハカコミとて、其葉茂りて根をこじむりあり

民部省式よ、諸國進年雜藥云く下野國十四種 青木香 芍薬 枸杞 黄菊花 藍漆 石解 秦膠 干地黄 桃仁 烏頭 附子 决明子 牡荊子 石硫黄とあり、今猶所々より出る、石硫黄ハ那須湯本より多く出る、れで但し此中よ黄連のなき、其頃、日光山関をざれあり

同人參

日光山の奥白根山よ、あつらひ生じるなり、本草和名よ、人參一名神草、和名加乃仁久佐一名久末乃伊とあり、釋名よ、時珍曰、人漫年深浸漸長成者根如人形有神故謂之人漫神草、漫字從浸亦浸漸之義、漫即人子後世曰字文繁遂以參星之字代之、從簡便爾、中立曰漫、即參也

下野國誌上

今日光山の麓大芦郷より多く作られたり、是は朝鮮種なりとも、土地に相應するに似て、自然なるべし。

同蕃椒

紫蘂の葉を巻く清蕃椒なり、風味他より超るべし、都鄙とも賞翫せられて、きく蕃椒の時珍の食物本草より遵生八牋等より載るに由、貝原氏の和事始より外國所々より其形を以て日本より豊臣大閣朝鮮征伐の時より始て取来たり、故に高麗胡椒と云々とあり。

大山田蔦草

那須郡武茂庄大山田村より出る上品なり、武茂庄より馬頭鳥山、黒羽太田原喜連川より常陸國那珂郡久慈郡より出る物を、大山田煙草と稱して、大江戸より交易に其産の莫太あると世の若る所なり、はて煙草は蓬溪類説より淡波姑草、漳州府志より淡芭

蔦草、本草洞詮より煙草一名相思草なりと云く、皆同物異名なり、朝鮮人の南草と稱しと云、貝原氏の大和本草小煙草慶長十年得於蕃舶と記し、南陽子が江府事始年表より慶長十年より始て煙草の種を長崎櫻馬場より植る云々と記し、然るに今海内にも多く弘く、此火の諸夷より賞翫せり、環海異聞等より、其の功効その外煙草の委しきこと、大槻茂實の蔦草録より、

鹿沼麻

都賀郡鹿沼駅の邊り大芦小来川より壬生枋木の邊りより出る、鹿沼麻と稱して交易に延喜主計式より下野國中男作物麻一百五斤とあり、往古より多く作ることを、委しき上の名所部安蘂山の糸小舉より、

伊吹艾

郡が伊吹山より出るを日本の最一といふ本草綱目も時珍曰玉安石字説云艾可又疾久而弥善故使又とありて孟子註も又治也とありて伊吹艾の事の上の名所部伊吹山の条も委しく擧げり

衣川黄骨魚 キヌカハアイサ

風民堂玄泉が日東魚譜に野下州呼名阿伊佐形似鼠頭魚青黑脇腹有赤條可愛西土呼薄紅梅氣味甘平無毒作贈佳美也益氣也記しりり此魚三月上旬より川の瀬々群が集るとあり日東魚譜小云如く此時脇腹に赤き條出き最愛以まりの有りてアイセともアイツとも呼ぶ

下野國誌十二之卷終

足利 北越

梅溪田崎明義畫 竹邨遠藤順信書

下野國誌あつたをく日おの龍の屋よりけり授食其つらく小欵いそり歎とつらくよみ歌

赤髮山せり歌

懐人まらり

ぬげとる黒髮山のやま春なれねの程もらうよふれ人ちりあつたあつた

安産川系

越智阿多倍守弘母

そのまふれ山にけりあつたあつたの川系はるけりあつた

三義山

倭文刀自

まぐりし山にけりあつたあつたの山は小橋をたけりあつたあつた

補陀汝山

源阿曾美惟一

まぐりし山にけりあつたあつたの山は小橋をたけりあつたあつた

郡漢野

権大僧都玄海

手を結くはりし於此野の景なりを思ひぬる事
権大僧都賢順

千の川の氷乃白波主婦の君をしののぬ毛野北園
藤原阿曾美綱教

宇考言古城

宇考の巻とれつりし事ふし成とす此志のれよ
清原末止高保

芳賀古城

わきゆまろみくちりし事賀の木村の末に
藤原阿曾美義長

小山古城

よし一歩の歩みはつらき後のもを
三善阿曾美真袖

伊吹山

いふ山はまのまののふりし事
丹治末止信義

多功古城

はらをの多き功とらりし事田那の名は
滋野深久社三豆

標茅原

かきつりし事の作し事
源阿曾美義長

室八島

そとにきし海にたると今そたむれ
平阿曾美直温

佐野船橋

船橋の強くは結く圓くやきある清世の佐野の才川
清原末止高興

寒々川

事を強くわきし事の波とすし川と立陣
藤原阿曾美宣業

横田古城

背つりし事とすの事とすし事とすし
藤原阿曾美宣業

發兌書林

東京日本橋區通壹丁目

北畠茂兵衛

同

通二丁目

稻田佐兵衛

同

芝區三島町

山中市兵衛

野州足利町

和洋舍

東京神田區榮町

大橋操吉

839
12
61

